共在感覚の時空間

澤田 美恵子

1　はじめに

木村（1996）はアフリカ、ザィールの農耕民ボンガンド（Bongando）における「出会い」「挨拶」「一緒にいる」といった、身体や空間にかかわる日常的相互行為について考察し、次のように述べている。

> 挨拶はそれまで不確定であった両者の関係を、一定の枠にはめ込む。挨拶によって両者の関係が構造化されると、その間に相互作用（interaction）がおこる。相互作用といっても、その内実は情報伝達、言明、非言語的な交流など多様であるが、ただ共通にいえることは、そういった顕在的な相互作用のバックグラウンドとして、それに参与するものたちが「私は今この人とともに何かをしている」という「態度のモード」を共有していることである。私はそれを「共在感覚」という言葉で呼んだのである。（p329）

小論では、「私は今この人とともに何かをしている」という感覚を、木村（1996）を踏襲して「共在感覚」呼び、この感覚を呼び起こすような現代日本語の言葉を手掛かりとして、「共在感覚」を感じる時空間の分析を試みる。身体的に非常に近い空間に他者が存在しても、「私は今この人とともに何かをしている」という感覚がないこともある。反対に空間としては離れていても、「もの」（携帯電話、パソコンなど）の使用によって「私は今この人とともに何かをしている」と感じることもできる。

現代日本語を観察すると共在感覚の存在が過去にもあったことを確認する表現や、今という時空間から未来へと続く時空間にも共在感覚を存在させようと意図する表現もある。こういった共在感覚は共同体を結束させることも

できるが、他者を排除することもできる。そこには場所性も関係する。小論では、言語、行為、場所性から「共在感覚」の時空間を浮き彫りにする。

２　言語－共同体へ入る暗号・合言葉

挨拶は人にとって普遍なものといえる。動物にも、出会ったとき挨拶が存在し、また人間社会で挨拶がない国はないと言われている。つまり挨拶は「社会的なつながり」をつくる大切な相互行為である。挨拶の仕方は、文化によって異なり、同じ文化内でも親密さの度合いによっても異なるため、母語話者にとっては、無意識に使っているものであるが、母語話者以外のものにとっては、言葉は簡単に使えても、その背景にある慣習や風習を知らないで使うと大きな間違いをすることがある。つまり、個人的に言葉を生み出すわけではない定型化した挨拶語には、使用する人が無意識であっても文化が色濃く刻み込まれているといえる。

「こんにちは」という言葉は、日本において、家族に対して使うものではないし、毎日同じ空間で働いたり、過ごしたりする人にも使わない。恋人同士でも最初は会ったときに昼間であれば、「こんにちは」を使うかもしれないが、親しくなり一緒に過ごす時間が増えるほど、会った時に「こんにちは」と言われると距離を感じ違和感がのこる。

比嘉(1985:p17)は次のように指摘する。

> 日本人の家庭で「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」という基本的なあいさつの言葉がそれほど使われていないのとは対照的に、「行ってまいります」「行っていらっしゃい」「ただいま」「お帰りなさい」のような外出と帰宅のときのあいさつ言葉はひんぱんに使われている。

「行ってまいります」「行っていらっしゃい」「ただいま」「お帰りなさい」という言葉は生活空間を共にする人に使われる言葉で、日本語を使い日本で

生活する人にとって「同じ空間に共にいる」ということを確認するのは、社会的つながりをつくるために重要なものと考えられる。日本の大学の研究室においても、同室内のメンバー間は「ただいま」「おかえり」といった挨拶は使用されるが、異なる研究室に入るときは「失礼します」「お邪魔します」などを使われなければならない。

氏家(1999:p76)は、「日本語社会の住人は前時代からの言語行動の枠組みや規制の中に生きている。ウチではあいさつ言葉を拡張させ、入念なあいさつ行動で一体感の惹起や強化に努める。「他者のウチ」圏内に出入りする、初対面の人に会う、という時には特定の形式や儀礼的な言葉を使う。ウチ・ソト区別の意識により集団の一員として自己を、また相手をみなす」と指摘する。日本語の挨拶語の考察から、同じ空間で共に時間を過ごすか否かということが、日本語社会のウチ・ソト区別に有意味であることがわかる。

また、職場で一度「こんにちは」と言った人に、もう一度同日のうちに出会ったとしても「こんにちは」も「こんばんは」も使えず、会釈するか、そのまま会話を始めることになるだろう。すでにその日は「同じ空間にいる」ということが確認されているからである。反対に見知らぬ人に「こんにちは」と声をかける場合は選挙かセールスなど何か意図がある場合である。

このように、「こんにちは」という挨拶は、一般的には家族には使わない。また最初は「こんにちは」を使用していた相手に対しても、親しくなると使わなくなる。日本語の「こんにちは」は文字通り「今日は」という意味で会話の場所である「今ここ」の環境を説明する冒頭の言葉であり、その後に続く言葉は「いいお天気ですね」とか「暑いですね」といった環境についての状況描写である。そして、それに答える時も「そうですね」と同意することが協調的なコミュニケーションを支える基盤となる。親しくなって、「こんにちは」を言わない関係に入るということは、いわば「今ここ」の環境を会話の題材として、「私は協調的にあなたと向かいあっている」と言明する挨拶をしなくとも、「私はあなたに対して協調的だ」ということは前提となるということである。つまり挨拶を言わなくとも会話が始められる段階に入った関係性では、その関係に固有の挨拶が生まれる。「よっ」「やっほー」「おっす」な

ど関係性によって挨拶は様々となり、時には複雑な合言葉のようなものさえ生まれるだろう。それはその関係の外にいる他者から見れば、その合言葉から秘密の様相を感じれば感じるほど、その関係に入れない、その共同体に入りこめない、つまりちょっとした排除の感情を味わうことになる。

日本語の指示詞の「あ」系も話し手と聞き手が共有する情報にアクセスできる言葉である(金水・田窪:1990)。話し手と聞き手の「今ここ」の時空間に指示物がない場合、「あ」系の指示詞が指すものは、話し手と聞き手の共有する情報空間へと指示物の探索は向かう。

（1）あの人、えーっと、名前思い出せない。あの人よ。

（2）あの頃は本当に良かったわねぇ。

（1）（2）のような「あ」系指示詞が指すものは、話し手と聞き手が共有する過去の時空間に存在したものであり、話し手は聞き手と過去の時空間において、共在感覚をもったことを手掛かりに会話をすすめようとしている。こういった会話においても、「あ」系が指示したものが何かは、共有する時空間がない他者にはわからない。

また日本語の助詞「も」の一用法(澤田:2007)もまたこういった共在感覚を引き起こす機能をもつと考えられる。

（3）夏も終わりか。

（4）太郎も大きくなったなぁ。

（3）のように、話し手の「今ここ」の季節についての表現は、日本に来たばかりで日本の季節について知らないであろう人には使えない。話し手の伝えたい「今ここ」の環境、言明している季節に達したことを理解できる人にしか使えないという特徴をもつ。また（4）の表現もまた、太郎という子どもに初めて会った人には使えない。言明されている存在が、時間の流れのなかで変化してきたことを、同じ空間のなかで確認してきた聞き手としか使えないのである。

つまり、この用法は話し手と聞き手の「今ここ」が過去から繋がり、過去においても同じ対象や環境を確認している前提が必要となる。話し手と聞き手は、同じ空間に存在し、現前の状況を、今確認しあえるが、過去において

も対象を認知できた聞き手にしか使えないのである。この用法は、話し手は聞き手に対して、「今ここ」をともに過ごしているという「共在感覚」を喚起させているだけでなく、過去においても「ともに過ごしていた」ことを、思い起させ、時間軸のなかで今と過去を繋ぎ、聞き手との「共在感覚」を強化することを狙った用法であると指摘できる。話し手と聞き手の「今ここ」の目の前の出来事について描写し、発話しているので、聞き手にとっても情報としてはほとんど価値のないものである。話し手は目の前の出来事について情感をもって発話し、協調的コミュニケーションに向かうことを同意した聞き手であれば、話し手に同感し、以前にも共に見ていたことを確認する返事ができる。

この節で見た言葉は、話し手が投げかけた発話に対して聞き手が協調的コミュニケーションに向かおうとしない態度の場合、その言葉は宙に浮く。「こんにちは」と話しかけて、「こんにちは」と答えてもらえない場合、「こんにちは」と言わなくても会話が始められると思って、「よっ」と声をかけて、「あなた誰？」というリアクションをされた場合、「あの頃はよかったわね」と言って「あの頃っていつ？」と返された場合、「夏も終わりね」としみじみ言っても、「けっこう暑いけどね」と不機嫌そうに言われた場合、いずれも話し手が協調的コミュニケーションに向かおうとした発話は行き場を失う。

３　行為－役割の付与と共同体の結束

この節では、行為に注目して共在感覚の時空間について観察してみたい。

さて、日本の伝統的な文化の一つである茶の湯における茶事を観察すると、小さな共同体を結束させるために必要ないくつかの行為が見えてくる。茶事は、茶事に招いた亭主と招かれた客（3 名から多くても 5 名）という小さな集団が決まり事に従って、茶室という限定された時空間で 4 時間という時間を過ごす。まず前座においては懐石という食事と酒、主菓子を頂き、後座において濃茶、続いて干菓子と薄茶を頂くのである。西洋のパーティと異なる

のは、ホストである亭主は客とともに食事をするわけではなく、懐石における千鳥の盃という儀式で酒を少し酌み交わす以外は、終始給仕の役割に徹することである。亭主も客も決められた言葉を発し、決められた動作を粛々と行いながら、懐石という食事は1時間程度、茶事全体では4時間程度で終わらなければならないという決まり事があるということだ。濃茶を飲むという最も大切な行為が終わるまで、ほとんど定められた言葉のやり取り以外の自由会話はされないことが多い。4 時間という定まった時間の中で狭い茶室という空間で決められた言葉を発し、決められた動作を行うという人工的な行為を観察すると、茶事が「亭主が意図した正客をリーダーとして、飲食を介して客の役割を明確化し、一つの共同体として結束させるシステム」としても機能することがわかる。

では、結束させるシステムの一つとして、まず定められた言葉から観察してみよう。例えば3名の客が招かれた場合、後座で亭主が茶を点てる位置の前に亭主から指定された正客が座り、その次が次客、そして水屋という飲食物が用意される部屋に続く扉の近くに末客が座る。そして前座において、懐石が亭主から出されると、正客は「いただきましょう」と他の客に声をかける。他の客は、声をそろえて「お相伴致します」と唱和して挨拶をする。この言葉は正客がリーダーで、それ以外は正客に従うということを明確にする。まさに茶室のなかにいるメンバーの序列関係を明確にさせる言葉である。茶事の前座に行われる懐石という飲食のなかで、例えば、焼きものや八寸、湯斗や香のものについても、必ず正客からとるという順番は重要で、また飯器からご飯をとるという一つの作業をとっても、必ず正客から順番にご飯をとり、蓋や空になった飯器は茶道口近くに最後に座っている末客が担う決まりとなっている。茶室という狭い空間にともに座っているということは自明なことであるが、単にその時空間で「私は今この人とともに何かをしている」という共在感覚だけではなく、まずは正客というリーダーがいて、次客、末客のそれぞれに課せられた役割の決まり事の行為を重ねることによって、序列関係は明確化されていく。正客はリーダーとして亭主と対峙し、末客は亭主の給仕が円滑に行われるよう手伝いをする役割を担っていく。また千鳥の

盃では正客の盃を借りて亭主が酒を飲み、亭主はその盃を借りたまま他の客を回り、順々に酒が酌み交わされる。茶室にいる全員が正客の盃、つまり同じ杯で酒を酌み交わし、契が結ばれるのである。

そして最後に客全員が揃って箸を落とし、一糸乱れぬように、一斉に音をたてる行為をして、この茶室の中の客は結束に向かう。懐石の時間は初座の間の 1 時間ほどの時間である、茶事は全 4 時間に及ぶ。この前座で客が正客を中心に役割が明確になり茶事を円滑に進めるよう結束できれば、後座の濃茶というメインイベントは成功するだろう、茶事は、様々な決まり事に従って、粛々とすすめられるが、肩が触れ合うような小さな茶室という空間で、飲食を共にし、茶道具を鑑賞して、4 時間を過ごすことで、互いの個人的な情報について雑談に興じなくても、どのような人物であるかを互いに観察しあうことは容易である。茶室にいる全員に一体感を生じさせる「一座建立」を目指した 4 時間が終わると、亭主のおもてなしに対して、客はある種の義理を感じるであろうし、客同士も人間関係ができ、結束力も強化される。この茶事のなかで行われる行為の要素「①同じ空間で同じ釜から自分の分のご飯を取り、食べる、つまり同じものを食べる。②同じ容器で酒や茶を飲む。②一斉に声や音をそろえて発する。④役割を与える。⑤リーダーのもとで同じ行為を行う。」は、共在感覚をより強め、共同体の結束を容易にする要素とも言えるだろう。

4　場所性

それでは最後に、場所と共在感覚の関係を考えるために、生活の時空間を移動して、仕事と家を得た人の証言を観察してみよう。事例は、20 歳で兵庫県から東京へ就職のために移動し、28 年間江戸切子の職人として働いている人の証言（2018 年 5 月 23 日午後 2 時インタビュー調査）である。

東京都墨田区から江戸切子で「マイスター」として認定された職人であるK氏は、20 歳で兵庫県から東京へ就職のために移動し、28 年間江戸切子の

職人として働いている。K氏は、「兵庫県から20歳で上京するときに、故郷のみんなが頑張れよと、駅のホームで見送ってくれた、だからそう簡単にやめて帰れない。俺ら上京組やから、家も仕事もこっちにあって、仕事やめて帰ったら、家も仕事もない。」「ものをつくる人はみんなそうやろうけど、プラモデルとか買った時から箱を開けるまでが一番価値があって、組み立てたら価値が下がるけど、僕らの仕事は何も価値のないところから始めて、自分の手にかかることで価値あるものが出来て、それをお客さんが買って、喜んで下さる。それが何より嬉しいし、やりがいがある。僕らこの仕事してなかったら、普通免許くらいしかもってないから。」と語る。この仕事では28年のベテランだが、奇数年でこの仕事を辞めたいと思っていたという。しかし、同じ給料なら、もっと楽で綺麗な仕事へと、一年ほどで江戸切子の仕事をやめていく仲間が相次ぐ中、K氏は地味でハードなこの仕事をやめなかった。それは、先ほどの発話にでてきたように、「故郷の人たちが期待している」コト、「仕事も家も東京にある」コトが理由であった。ところが、誰もがもらえるわけではない「すみだマイスター」という江戸切子職人として価値ある称号をもらってからは、やめたいという気持ちが落ち着いてきたという。インタビュー調査の最後には「墨田区の人たちに認められているのは有り難い」と述べられた。

他者によって、自己が承認されるということは、人間にとって必要なことだ。「上京組」と自称するK氏は、東京という時空間で20歳のころからどれほどの排除の気分を味わってきたのだろう。しかし今は、「すみだマイスター」という称号をえて、墨田区という場所は自分がずっといて良い場所だと確信できた。K氏はマイスターに認定されたことによって「私は今この人とともに何かをしている」と共在感覚を東京の墨田区で感じられたのだ。同じ言語を使い、その共同体で役割が付与されていても、その共同体から出ていきたいと考えることはある。しかしながら、「あなたの役割はこの場所でかけがえのないものである」と他者に認められることによって、人は「私は今この人とともに何かをしている」という共在感覚を持続させたいと思えるのかもしれない。

５　おわりに

角田光代氏は、2018 年 6 月 8 日朝日新聞の朝刊（文化・文芸欄）でカンヌ国際映画祭最高賞パルムドールを受賞した是枝裕和監督の「万引き家族」に対する寄稿で「この家族が、言葉に拠らず共有している暗号を、当然ながら家族以外の他者は理解できない。理解できないものを、世のなかの人はいちばんこわがる。（中略）よく理解できないこと、理解したくないことに線引きをしカテゴライズするということは、ときに、ものごとを一面化させる。その一面の裏に、側面に、奥に何があるのか、考えることを放棄させる。」と述べている。

小論でみたように、人は他者と言葉や行為によって「私は今この人とともに何かをしている」という共在感覚を感じて、共同体を形づくる。そしてその共同体のメンバーだけが理解できる言葉や行為の暗号を持つ。また共同体を維持するために、役割を付与し、それを認める。こういった共同体を結束させる道具となる言葉や行為や役割やその認証は、諸刃の剣であり、共同体の結束力を強めると同時に他者を排除する機能ももつのだ。

一枚岩や一心同体という言葉はその共同体の中にいる一員にとっては、心地良いものであるかもしれないが、それは一歩誤ると社会との通路を失い、他者に排除の不快感を味せる。共在感覚を共起させる言葉や行為は協調的コミュニケーションに向かうために重要なツールであるが、それが共同体以外の人にとって、どのように映るか、どんな意味を持ってしまうかということを意識する必要はある。また共同体内での共在意識が強くなり、持続の時間が長くなるにつれ、共同体のメンバーのみに依存が集中しがちになる。しかし依存の集中もまた危険が伴う。紙面の都合上、「依存」についての議論は稿を譲り、依存先を分散させることの意味（熊谷:2013）を考え続けることのみが、共同体のメンバーにとって「未来への扉」となるということを指摘するに止め、小論を終えたい。

参照文献

Gibson, James Jerome(1982) ”Note on Affordances.” Reasons for Realism; Selected Essays of James J. Gibson, ed. By Reed, Edward and Rebecca Jones, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, 401-418,(「アフォーダンスに関する覚え書き」境敦史訳『ギブソン心理学論集　直接知覚論の論拠』勁草書房、2004,337-369)

比嘉正範(1985)「あいさつとあいさつ言葉」『日本語学』vol.4 明治書院

本多啓(2006)『アフォーダンスの認知意味論』東京：東京大学出版会

木村大治(1996)「ボンガンドにおける共在感覚」菅原和孝・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』東京：大修館書店

木村大治(2003)『共在感覚　アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』東京：大修館書店

金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展３』85-115, 認知科学会

熊谷晋一郎 (2013)「 依存先の分散としての自立. 村田純一 (編), シリーズ「知の生態学的転回 : 人文科学のフロンティア」第 2 巻技術 :『身体を取り囲む人工環境』 109-136, 東京: 東京大学出版会.

沼田善子(2009)『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房

中尾有岐(2008)「並列事態が想定しにくいモについて」8 巻 1 号『日本語文法』くろしお出版

野田尚史(1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』東京：くろしお出版

澤田美恵子(2007)『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』東京：くろしお出版

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』東京：くろしお出版

氏家洋子「日本社会の出会い・別れのあいさつ行動―ソトの人との生産的コミュニケーションへ」『国文学』第 44 巻 6 号　學燈社